



豪快にナイスショット!

『町民スポーツフェスティバルパークゴルフ大会』が、9月22日、旭ヶ丘パークゴルフ場で開催されました。男女合わせ80名の参加で、秋晴れの中、豪快なショットで会場が盛り上がりました。結果は右記の通りです。

- 大会結果 (各組優勝者のみ)
 (4コース、36ホール、パー132)
- 男性A組 (13名) 優勝 中山 吉孝
 - 女性A組 (8名) 優勝 浦 麗子
 - 男性B組 (12名) 優勝 砂野 凱宣
 - 女性B組 (8名) 優勝 伊藤 順子
 - 男性C組 (13名) 優勝 佐藤 俊彦
 - 女性C組 (8名) 優勝 会田 登佐
 - 男性D組 (13名) 優勝 吉田 治
 - 女性D組 (7名) 優勝 阿部 恵美子



11月3日(土)は開館記念日。美術館、風土館とも終日無料で観覧できます。

開館時間は9時～17時 (入館は16時半)

●11月の休館日● 6、13、19～21(展示替)、27日

木々の葉が舞い落ち、初冬の情景に変容する頃となりました。温もりあるミュージアムで初冬のひと時をお過ごしください。

展覧会のお知らせ

常設展

「小川原脩 自伝風な展覧会—定番作品展—」18日(日)まで

「小川原脩 自伝風な展覧会—小川原脩*どうぶつランド」

小川原が描く動物たち、どこか人間臭くて、ユーモアがあって哀感が漂っている。動物を描いた作品ばかりの展覧会を開催します。

会期：11月22日(木)～2013年4月14日(日)

企画展

「北口さつき・高橋靖子・宮崎むつ 三人展—線を紡いで—」18日(日)まで

「上田茂展—澄明な風景」

柔らかく、淡い色調の水彩画。四季折々の透き通った情景、心が洗われるようです。

黒松内町在住の水彩画家上田茂さんの作品を展示しております。

会期：11月22日(木)～2013年1月14日(月)

ミュージアム通信

小川原脩記念美術館

☎21-4141 FAX 21-4142

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/town/somoa/index.jsp

俱知安風土館

☎22-6631 FAX 22-6632

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/town/huudokan/huudokan.jsp

木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

没後50年「木田金次郎と中谷宇吉郎」

11月8日(木)～2013年3月31日(日)

美術館講座最終回

「平成の生れ出悩み2012」11月10日(土)

西村計雄記念美術館 ☎ 0135-72-2525

風景との対話—北海道、パリ、沖縄—開催中
 トライアート「アドベント・カレンダー」に挑戦!

11月17日(土)13:00～ 材料費400円

11月1日(木)は開館記念日に付き無料開放

荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

「時代を創る手」開催中

海と山と田園と—ミュージアムロード情報—

町長室から

朝晩はめっきり寒い日が続くようになりまし。10月には羊蹄山の初冠雪があり、まもなく二セコ連峰も雪に覆われ、いよいよ冬將軍の到来です。昨年の大雪によるショックはいまだ記憶に新しいところですが、今年はどうか平年並みの降り方であって欲しいと祈るばかりです。今年もあと2カ月ほどを残すのみとなり、これから来年度の予算編成に入ります。なかなか明るい出口が見えない地方財政。まだまだ我慢の日が続きそうです。

先月から始まりました「まちづくり懇談会」では、お忙しい中ご参加くださいました方々へ、お礼申し上げます。今月も7会場において実施いたします。14のテーマを用意し、お話しします。お待ちしております。

これからの時期、道路が凍結するなど、冬型の交通事故が多くなります。早めの冬タイヤ交換などを心がけて、事故防止に皆さんと一緒に取り組んでいきましょう。

福島世二

感動一点の場

『風倒木地帯』

1970年頃 小川原 脩画

1960年代から小川原は好んで馬を描くようになった。そのほとんどが農耕馬である。図体の大きな、筋肉が異常に盛り上がった馬である。60年代に描かれた馬は、ユーモアとペースが混在している。もがき苦しむ馬、歯をむき出して笑う馬、風雪に耐え遅く生きる馬、群れをなす馬、不用になり行き場を失った馬などなど、すべてがこの時代を物語っているようだ。1970年、小川原は北海道から本道開拓の歴史記録画のひとつ「伊達に入った人々」の制作を委嘱された。伊達の開拓に赴いた伊達邦成はプラウやハロー等の西洋農機具を導入し先駆的な農業に取り組んだ。小川原は取材のため数度となく伊達を訪れ時代検証を重ね、遅くプラウを曳く馬を描き作品に仕上げた。その勢いがこの色紙にも現われている。



ふるさと探訪

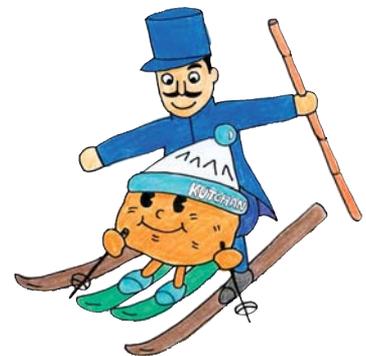
あの時代 この時代

その40 『ゲレンデ整備』 昭和30年代

355回



◀ スキー場整備の様子（昭和38年）



今年はスキー伝来 100周年

第40回全日本スキー選手権大会誘致は、比羅夫スキー場のリフト建設が第1の条件でした。倶知安町とニセコススキー連盟（理事長秋山有俊）は日東商船の竹中社長にリフト建設の協力を要請しました。これを受け、その後ニセコ高原観光株式会社を設立した竹中社長は昭和36年7月20日に延長1,070mのリフト建設に着手しました。同年12月17日リフト開きが行われ、比羅夫スキー場は近代的なスキー場としての幕開けを果たしました。前後して比羅夫橋の永久化、宿泊施設、スキー場民宿組合、

さらに第2のリフト会社サンモリッツリフト株式会社の設立など周辺施設の整備が行われ、現在のスキー場の基盤づくりがなされました。

将来を見据えた初期投資、その御苦労は並大抵なものではなかったはず。こうしてスキー場や周辺施設の整備が進む中、比羅夫スキー場は北海道有数のスキー場としての地位を築いてゆきました。